



俳諧十家類題

春





滄心のを出てまれ御詔のを以
 と承奉御詔のを以て承奉御詔のを以
風流のま廣くま今やと湯云
 すままままままままま乃四
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 有將其題

いんげん

意の存焉馬もひめれと也易きい
に力り大かうが一紙に墨してはく
解のいと口をわのばに遊ぶの
感慨志ほをわうと酒飲れ
のさあし好しとるに臨み新
古より心を深温古をけり志
かこ形しとる其色の便を致

序二

多母か世に心画けりまね唯
憤馬として自放ましくし業
肆の紙板ハハゆる汁の輯の
中より撰出せりまよる縦横の記
変の云々をい集めて五六帖
乃舟る心ある牙う端さよの書
免にこころにけり道の証を

乃の癖をさす蛙蟻の運い
 のほる乃の階よりさす臺を彌る

寛政二年

未仲替

浪筆

海村徳

俳諧十家類題集春之部

○ 目録

正月	睦月	初空	年明	今朝春	明の春
初春	千々春	御代春	花春	春立	宿の春
元日	初日	歳且	三朝	年立	新年
日の春	年新	二日	齒朶	齒固	削掛
恵方棚	門松	栞	松鋸	鋸竹	鋸繩
四方拜	若水	雜煮	蓬菜	喰積	穂俵
野老	小殿原	年男	庭竈	年玉	羽子
破魔弓	試箋	箋始	初夏	着衣始	寶引

寶船	み	狹子	の	日	初寅	薺	き	ら	こ
菜摘歌	七種	若菜	帳	狹	十一日	踏	分		
廿日月	懸名	法忌宿	東風	春風	春雪				
雪消	雪間	福寿竹	落の臺	至	若草				
春の山	春野	杉菜	梅	八	卧龍梅	紅梅			
柳	青柳	霞	雪	五	春雪	百千鳥			
春夜	春夕	や	春	春の宿	宵の春	白魚			
海苔	春の海	春の水	數入	大	二月	衣更着			
傳奏下	初牛	薪能	二月堂	九	吉野餘配	涅盤			
彼岸	水間	春写	拋月	千	春月	出代			
雉子	燕	春曆	行曆	帰曆	雲	雀			

目一云

雀子	親雀	蝶	蛙	雨蛙	暮
猫息	陽炎	田螺	蜆	蛤取	馬刀
飯蛸	初擧	糸擧	椿	擧	梅木
燒野	と	畑	耕	種下	種俵
種	苗代	芥	芥花	土	菜
烏賊	獨活	芽	山葵	狗脊	蕨
几巾	春雨	三月	上巳	拋節	雛
草餅	園鷄	曲	汐干	貝	冷
冬鎮	寒食	佛身拭	柶	海棠	梨花
花	擧	擧	人	花衣	落
擧	青	和布	傀儡師	青麦	は

山吹 蘇 莖 菊苗^圭 茶摘 遅日
 炉塞 唱ふる 柳 鮓 小 鮎 蚕 少^々
 別霜 行春^圭 春の暮 暮春 春限 春惜
 春を送 晚春 春盡^圭

俳諧十家類題集春之部

○正月

八千坊 輯校

睦月 能ふ節 見海ふれり 佳 月 言水
 初空 初空 初空 初空 初空 初空 初空 初空
 年の明 娘 今朔春
 来山

初春

日のひかりと影も輪のからり
雪の中は葉も花もいづれのま

其角
嵐雪

初春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
希因

予春

雪ももつちも春潮生てゆくま
月ももつちも一ち夜を流代り

其角
芭蕉

後代春

後人うきもすしゆくまのま
後中ゆくは雪もぬるもすし

其角
芭蕉

花春

後中ゆくは雪もぬるもすし

其角
芭蕉

春

雪ももつちも春潮生てゆくま
月ももつちも一ち夜を流代り

其角
希因

宿の春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
素堂

元日

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
沾徳

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
言水

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
芭蕉

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

春

雪のまじりゆくは信りし都人
後をゆくは雪もぬるもすし

其角
其角

初日	えりも旅人をえりも大治のま	治徳
歳旦	えりも新茶むつし焼こ喰	来山
三朝	えりも中街しうしうのちり	嵐雪
年立	えりも中まきそ在りまきそり	来山
新年	えりも中せんるお川のあれる	麦林
	天のうまぬきまらけしお目乾	芭蕉
	年し中様まきまきまき様りぬ	嵐雪
	えりも中おこくまきまきまき	其角
	年まき中家中のれるお目乾	芭蕉
	お合し中新年まきまきまき	

大 二

日の春	日のまきまきまきまきまき	其角
年折	掛ぬきし教えて年の折るり	来山
二日	二日まきまきまきまきまき	芭蕉
	<small>ひかり睦月二日 はりのまきまきまきまきまき まきまきまきまきまき</small> 掛ぬきまきまきまきまき	嵐雪
齒桑	齒桑のまきまきの七折り待と山度桑	言水
齒固	齒固やまきまきまきまきまき	
削掛	まきまきまきまきまきまき	其角
恵方棚	西折りし厚たまきまきまき	言水
門松	桑まきの四折りまきまきまき	其角
	二まきまきまきまきまきまき	麦林

楪 松 饒 饒 四方 若 雜
 縋 竹 繩 拜 水 煮

由はりぬしの世はゆきまらやまら
 米をまよひて世にのちこころり
 ねこころり伊勢のちこころり人の後
 けし合のねこころりこころり
 けし合のねこころりこころり
 こころりやまら饒山まら四方拜
 こころり饒のねこころりこころり
 こころり智恵の鏡を磨かや
 こころり老をまらこころり
 人もまら饒煮こころり饒煮こころり

嵐雪 芭蕉 其角 麦林 言水 其角 嵐雪 麦林 言水

寿三

蓬 菜

喰 積

能くははんと饒煮まら人時
 三梳の饒煮こころりやまら者こころり
 米をまらこころりやまら伊勢のね後
 こころりまら作らまら
 こころりまらおのちまら
 こころりまらおのちまら根
 こころりまらおのちまら山
 こころりまらおのちまら
 こころりまらおのちまら
 こころりまらおのちまら

来山 燕村 芭蕉 沾徳 言水 其角 来山 燕村

喰積 嵐雪

穂俵

ほたるや中流にわたるのさへ向竹

沾徳

野老

とろろとろろとろろ大志のまひり

其角

年余歳
北也

海老のそを越ぬ魚とく小原系

言水

年男

白魚のうらも撰きり年男

其角

庭竈

庭竈牛も新志を居りま

言水

年玉

やま玉は折れる小川の音に

言水

羽子

まはせ 我まあし折の羽子

其角

破麿子

もろもろや中流にわたる四天玉

来山

二月集
小川の音に

もろもろや中流にわたる四天玉

来山

試筆

ぬるぬるとさき耕りてこ田のうら

沾徳

其角

華始

大津路のそらの光を仰佛

芭蕉

初夏

初夏や露りりりりりりりりり

其角

着衣始

花條の羽袖やしきひれを若る

言水

空引

空引よ鳩牛の角をさすく

其角

空船

夏明け浪のそらや仰佛寺

嵐雪

水祝

水祝のそらも女房をせんを祝

其角

子の目

生死のむらも男をせんを祝

其角

子の目

生死のむらも男をせんを祝

其角

初寅

初寅のそらも女房をせんを祝

嵐雪

初寅

初寅のそらも女房をせんを祝

其角

懸石	廿日正月	踏歌	十一日	帳祝
えりよさくきぬ衣そけりこけし	正月廿日又さうと終老のま	帯せぬそお代さうやうと終老のま	おけおを還珠樂のたけとくさ	あまはるあまはるこころのこけ目
言水	嵐雪			其角
				言水
				麦林
				来山
				希因

云云

御忌詣	東風	春風
清きりのこ四別飛布曉を	清波女や系をきくる清き詣	清き風のこころのこけ目
言水	其角	其角
	蕪村	蕪村
		来山
		来山
		蕪村

春雪	雪消	雪間	福寿州	落の菫
曙のむくく風の幕や春の空 片所よこしくは海や春の風	傾危まゝもぬまてけりまは雪 北国のまゝかゝるる雪消る如	折るて留をらんも春の如 福寿州一寸もけりぬなりけ	陽も春や麦のこまを福寿州 弱くもて春も春の落の菫	梅の香やけりてと落の菫 春の香や柳を春の落の菫
来山	沾徳	其角	言水	麦林
				其角

五七

若竹	春野山	春那
若竹の枝を春の風 春野山の九日の如く山に 春那の如く春の本丸を春の風		
芭蕉	来山	沾徳

嵐雪
蕪村
嵐雪
芭蕉
来山
沾徳
来山

梅 杉 菜

路くいのあひてもちる杉菜節
山の上を万葉道へ梅のうれ
中へもしく枝の中を梅の子
さる鳥が来い梅のうれ
こころよよ枝の中を梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ

泊徳
芭蕉

三六

樹と梅のうれ

小神よせして僕も梅のうれ
常のむえ梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ
梅のうれさる梅のうれ

其角

猿押のこまきるふたに梅のふ 其角
 石八のこひてまや一團り 梅
 梅さくく雪定りのそれ匂う梅
 氷肌玉清 氷肌玉清 芳らうくく花もまきくも梅の皮
 せんとくそのまきく梅ふむめのふ
 あせそを鏡目あても梅りよはひが
 きよよまきくさくひくやむめれま
 梅さく香やと念のやゆも歌くく
 清観をふまきくを梅さく梅さくま
 梅一掃くくくくくあくくくくく
 嵐雪

九
 嵐雪

梅さく結ふ梅をぬきくく月あ
 梅さくくやさきくくくくくくく
 梅干しやえきくくくくく梅のふ
 この梅をさくくくくくくくく
 梅さくくくくくくくくくくく
 このゆりぬ背中を梅のまきく
 梅さくく香やいらくくくく風
 おきふくくくくくくくくく
 来山
 希因

嶋牛豆いんぎんをくろく柳いんぎん 其角
 内いんぎん小治の歌えり柳いんぎん
 月あは枝つゝ傳や柳いんぎん 嵐雪
 他又鶴をいんぎん飯名おぢい柳いんぎん 素堂
 朋をかろく牛の尾哉柳いんぎん
 嶋の網又すききり柳いんぎん 希因
 柳いんぎん庭と歌きり柳いんぎん
 庭柳いんぎん海名よき柳いんぎん 麦林
 庭いんぎん庭いんぎん日よき柳いんぎん
 庭いんぎん庭いんぎん日よき柳いんぎん

青柳

いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん 蕪村
 いんぎんに柳いんぎんいんぎん柳いんぎん 蕪村
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん
 柳いんぎんいんぎんいんぎんいんぎん柳いんぎん

霞

まろりやうんねんさうねん
たひもまをさぬねん
後ろかへねん
花をさへねん
恒くと山記うん
破生経もまむ数ひの海
日枝よとておのねん
棘かまをうん
指南車を破地より

芭蕉
沾徳
嵐雪
希因
言水
燕村

鶯

さや柳りうん
掃除くまぬ日
さや後ろとて
うん
井とてさ
借月うん
うん

芭蕉
沾徳
其角

うらひなれはをさるゝ物ぞ和 麦林
 夢の心城らしき月日なし
 夢の心く目ざしは山すしぬ
 夢の心くもはしけり乃美
 うらひなれは啼やうらひなれは
 うらひなれは麻おまゝにあり
 夢の目枝をうらひなれは
 うらひなれや家内あはて飯
 うらひなれや花うらひなれは
 うらひなれはうらひなれは

去十一

夢の心くもはしけり乃美

うらひなれはをさるゝ物ぞ和

春宵 伶人の門まらうや美の声 其角

百千鳥 借玉川 後各 の上を柳らむえり百千鳥

春夜 美のおをくららうらひなれは 本多孫加云 其角

うらひなれはをさるゝ物ぞ和 其角

春夕 閑情の端をうらひなれは

美の夕をうらひなれは

や、春 美の心をうらひなれは 芭蕉

春の宿

折行は鳥帽ふらふらうらうの宿 蕪村

春の春

筋道よふらんあさうらうの春

肘白く傍のうらう原や春の春

公まきり 狐化しう 春のうらう

春の春梅よちうらうの白煙

白魚

白魚やまきり目をわくはの細

菜摘はし 白魚をうらう川

白魚の色をうらう川の川

白魚や 海苔をうらうの春

白魚や 漁をうらうの春

蕪村

其角

芭蕉

其角

十七

海苔

白うたやまきりうらうの春 来山

白うたやまきりうらうの春 其角

春の海

春の海は白くうらうの春 蕪村

春の水

春の水は白くうらうの春 其角

春の水は白くうらうの春 沽徳

春の水は白くうらうの春 蕪村

春の水は白くうらうの春 蕪村

春の水は白くうらうの春 蕪村

美多や四糸又條の持の 下 蕪村
 持たして日言んといふ事あり
 まりの背戸又田作しんといふ
 ところありまうたぐ持縄の勢言
 地を長く入籍のありしや其の
 子もあつたやふといふ日くれ
 養父入籍もや入のややれといふ
 や入のや半合意して大京と
 義つやつたうりといふや其
 義つやふといふといふはし

三十八

や入のや守家をもといふ事
 其ら又入や鉄おのといふ事
 や入のや中山寺の男といふ
 や入のや山寺の男といふ
 義つや半合意のありといふ

蕪村

○二月

夜更着
 伝奏下り
 伝奏の事ありといふ事
 伝奏の事ありといふ事

嵐雪

沾徳

初牛

この牛やけつりの乳母を夕月

治徳

知牛やまの氣ふむまは人

いのちまうりやうしよてやうう山

其角

左京の
初牛

知牛やまの氣ふむまは人

知牛やまの氣ふむまは人

其角

この牛やまの氣ふむまは人

この牛やまの氣ふむまは人

薪能

地佩のまえまうりなる薪

治徳

拿やし薪のありしるる

其角

二月堂

あまやし秋の信れ留りふ

芭蕉

十九

吉野燐砲

かゝり井戸の流流待ふる言水

言水

海能の国極人このまの巻

其角

涅槃

氣やう涅槃の揚るる

言水

不生不滅の
涅槃

さうまをひてさうま

給うひのちてさうま

希因

給うひのちてさうま

老僧の死候ひあり涅槃像

表林

下まも掛まぬは中涅槃像

牛の角二箇ありしるる涅槃像

彼岸

海へ身を去るはなはた 彼岸花 其角

影をたもたぬはなはた 彼岸花 来山

命婦のうらみはなはた 彼岸花 蕪村

水間

とらふはなはた 水馬より 水馬寺 其角

春宮

とらふはなはた 水馬より 水馬寺 来山

臘月

初月甲申のうらみはなはた 言水

梅のうらみはなはた 其角

梅のうらみはなはた 其角

梅のうらみはなはた 其角

中川やうらみはなはた 嵐雪

考二十

月や梅を雪よき 来山

月や梅を雪よき 来山

月や梅を雪よき 来山

月や梅を雪よき 来山

月や梅を雪よき 蕪村

月や梅を雪よき 希因

月や梅を雪よき 蕪村

月や梅を雪よき 蕪村

月や梅を雪よき 蕪村

月や梅を雪よき 蕪村

春月

さ〜ぬをさ〜ぬくおや掛月 蕪村

春月や下合堂の木のるより 沾徳

あ〜のりや〜のり後居のあ 蕪村

あ〜のりや〜のりあ〜のり 嵐雪

あ〜のりや〜のりあ〜のり 其角

あ〜のりや〜のりあ〜のり 麦林

あ〜のりや〜のりあ〜のり 蕪村

あ〜のりや〜のりあ〜のり 芭蕉

あ〜のりや〜のりあ〜のり

出代り

東漸

雉子

終るも昔の遠くさ〜さ〜 沾徳

尾をひきさ〜さ〜 言水

さ〜さ〜さ〜さ〜 其角

さ〜さ〜さ〜さ〜

さ〜さ〜さ〜さ〜

さ〜さ〜さ〜さ〜

さ〜さ〜さ〜さ〜 希因

さ〜さ〜さ〜さ〜 蕪村

さ〜さ〜さ〜さ〜 嵐雪

終る鳴中、地を下りの驛

舎

蕪村

木尻の橋より鳥影ひ住むとくはか

却つて起て終る遠く大やい草

遠くへ通つ入大やい草のりく色

策列は雲をさるやし終るのくえ

日くくは終るのくえのくえ

元山やいらよかくまて終るは

ましくくは終るのくえのくえ

葉を根り鳥のぬ目とぬき

茶のつらよ終るのくえのくえ

蕪

其角

言水

麦林

其角

海向の虹をきくはるはるはる

傘の影はくはるはるはる

山の影はくはるはるはる

川意編むはるはるはる

麓よ入るはるはるはる

柳の影はくはるはるはる

志かえも今折よはるはるはる

山の影はくはるはるはる

蕪や何をくはるはるはる

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村 蕪村

大津路の蕪村

大津路の蕪村

大津路の蕪村

小田の蕪村

小田の蕪村

小田の蕪村

小田の蕪村

小田の蕪村

小田の蕪村

春雁

行雁

帰雁

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

蕪村

雀子
親雀
蝶

帆柱のせきまうりあうのきき有るま
草脚て早よかきふや夕き雀
雀ふや一りうり雀の無り新
あきまうりやうけうり雀
部あき一吾友ませぬる小蝶
百とせきまぬるう葉のうきま
移むる蝶あき一 けきまうりま
葉屑ま雀をうきま一 及蝶
蝶うの中様をうきま系を友
うきま中様をうきまのききま

其角
麦林
其角
燕村
芭蕉
其角

と云世四

蛙

夕日敷町中まききま
角うきまうきまうきま
まき蝶あきまうきま
うきまうきまうきま
玉川や蝶うきまの寄
まき蝶あきまうきまの蝶
まき蝶うきまうきま
まき蝶うきまうきま
まき蝶うきまうきま
まき蝶うきまうきま

山嵐雪
来山
燕村
言水
素堂
其角
嵐雪

陽炎

足跡をばまらう入揚や雪の中
 猫の意こや毛もも似たりきり
 川意中揚の意も似たりきり
 両方よ整いりきり揚のこひ
 系所の揚のこひきり揚のこひ
 かしらうの中、紫の系りきり
 うきうきの中、山破の妙も似たり
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる

其角
 来山
 嵐雪
 来山
 其角
 芭蕉
 其角
 来山

長柄

田螺

陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる

其角
 来山
 蕉村
 其角
 来山
 蕉村
 其角
 来山

現

田螺

陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる
 陽をばまらひる
 かしらぬ火の湯をばまらひる

其角

蛤カキ

つるつるやれ浦の陰蔭ことふ

来山

馬刀

ふきつる刀かきせし草の鞘

嵐雪

飯蛸イハヒ

飯蛸の舌も中ばさる果るけ

沾徳

初極

人のかきかきかきかきかきかき

言水

葉を冷しよ未むしひけりおはら

其角

皆と葉や院よのころおさる

其角

山人をその同あしおはら

希因

元とると知恵けり山やあさる

来山

糸極

糸をひぬる極きりきり糸極

其角

織木よる長女ユサメのや糸さる

嵐雪

椿

椿のつとて椿しる椿しる椿

芭蕉

あつ川又細羽お年とるあつ極る

素堂

あつ川いさめて椿しる椿しる

希因

あつ川いさめて椿しる椿しる

希因

あつ川いさめて椿しる椿しる

嵐雪

あつ川いさめて椿しる椿しる

来山

汲溜てみりし多かりし花はをれ

来山

らうき水巾様落うはむ雪とま

蕪村

おのりの産みりしひびく様はれ

、

接穂

えんこいの花をさうり接穂が

嵐雪

接木

垣越りしきりうらからる接木をま

蕪村

焼野

まのくまよ小田うりおれ焼野をま

、

とくろ

野とくろれた焼る比産のまをま

、

畑

焼のう巾やまく後のまをま

嵐雪

畑うらたうえてえきる菜飯を

蕪村

蕪村

世二

耕

畑うら巾やうらうらぬきまをぬ

、

種下

畑中本のうらおちの落付ま

、

種

畑うらまのまをぬぬまを

、

種

耕やふ石の粟のけりし魚

、

種

種ふりし依は法を小柄の部

其角

種

種ふりし天乳定先て種下し

、

種

古のの流を成川つ種ふりし

蕪村

種

よのけりしまをさるや種

、

種

種うらやた神宮く一はう

其角

苗代

苗代や花はたをばくする畦はとて

其角

苗代より老のちとくや庭のたき

嵐雪

苗代よ葉山まいられとまきの言

麦林

苗代のもみはよけよけの那

蕪村

苗代や秋のの揺らぐより

言水

浪州よりぬけりちとくか

其角

休のつゆを揺らぐよれに那

蕪村

是切りて後をさうり芥の中

蕪村

古寺やふくろく揺らぎのち

其角

芥花

土筆

とくこくと揺やしほまのやつくし

其角

那嵐のそれをうららんはらじ

来山

出まなまきとく後よとれ合らぬ

言水

菜のそらや流も桂もまきま

芭蕉

尾寺よ只菜の花れまさうり

来山

菜柄よりふえんたまる花の那

蕪村

かいやうとる山吹ぬとて菜種を

其角

那のそらや菜種つ菜を山の陰

蕪村

たのそらや菜種つ菜を山の陰

其角

菜のそらや月を来よりを西

其角

鳥絨

独活

茅独活

山葵

狗脊

蕨

茅のこまや 蘇もよみ 海言ぬ 蕪村

かまふ鳥絨の 思ふよかきき 沾徳

山葵の 名をたふし 作福活 其角

せうしなまら 瘦けき 作福活 嵐雪

まをまし 山葵 来山

泥塵の 膝や ありき 土こき 其角

狗脊の 茎よ ちりき 嵐雪

一人の 蕨の かけ ねりき 沾徳

ろしひ 野中 蕪村 蕪村

まをまら の 髪よ ちりき 希因

凡巾

凡巾 襦ふ 八えぬ 詠う 那 言水

ちりき 巾 ちりき 凡巾 其角

あまぬ 巾 ちりき 凡巾 其角

かろし 巾 ちりき 凡巾 其角

本の ねり 巾 凡巾 嵐雪

はたア 新 襦 巾 凡巾 嵐雪

糸は 巾 凡巾 嵐雪

凡巾 巾 凡巾 嵐雪

やふ 巾 凡巾 嵐雪

蕪村

汐干

多折の尻よりまゝ家汐干也 芭蕉
 帯履より川に流して汐干也 沾徳
 汐干より流中を流して車 言水
 乾くも比目を踏んで汐干也 其角
 汐干にして母にてまき次希貝
 そのふり網釣はまきしは干也
 一日を為の汐干や日の海 来山
 志母ひられ船漕り流るる干也 嵐雪
 毛襦をまきしは海航や汐干也 麦林
 拾て芥よりまきしは干也

五卅八

貝拾

海にのみけ非ふ所なり汐干也 来山
 仔細て貝系てまきしは干也 沾徳
 貝拾り中向所の末に流して 其角
 子安貝二見の酒を差ゆりぬ
 まきしは干也芥よりまきしは干也
 夏夜中塩漬よりまきしは貝
 屋よりまきしは干也上りまきの栗
 まきしは貝雪のまきしは干也
 江崎の貝拾りまきしは干也
 相柳民濃の菜飯人より拾り

五月精飯

嵐雪

花鏡
寒食

弁ゆりさき花神の花 鏡 言水

まき食ひ 寒食下は猫の目と寝し 其角

くまきさきさきさき食ひのまきさきさきさき

御身拭

洗ひ拭洋土や水の 誠後布 言水

桃

石燈の葉の濃ひらや花の 沾徳

五木
有奴

けのくさきり子老丸の 桃の 嵐雪

あひくしの 桃の 等持院

桃の 白の 解きも 又くは 又くは

無よさきさきさきさき 其角

まきさきさきさきさき 希因

三十九

海棠

海棠や けのま 新玉の 希因

梨花

甲斐さきさきさきさき 沾徳

梨の 子さきさきさきさき 希因

まきさきさきさきさき 麦林

桃の 白の 解きも 又くは 又くは

無よさきさきさきさき 其角

まきさきさきさきさき 希因

海棠や けのま 新玉の 希因

甲斐さきさきさきさき 沾徳

梨の 子さきさきさきさき 希因

中の歌もよつし花の連分堂 佑徳
 退付こぬけし春風もよそよそ
 折ともも花のつれせつれつれ
 是と歌をのらうと友をまうらう
 彫り魚徳義よつせん深き水
 只なるよや海皮をなつらつるよめ
 中よけてやうまうまう 寺あり
 ともよももらうらうらうらうらう
 名さありや 佐^ダ意五^ダ柳^ダ家^ダとてめ
 とうれつしつしつしつしつしつしつ

其角

是れおそ人の福よらけりしん
 ともよ陸よこのよんやんやん
 大佛徳くはむんともりの目
 赤きまをよせそ 似合ん人の後
 花ひしつ 徳よは 龍のまゆし
 此しとまのりらあや 笠節扇
 縁うらまきこまきこや 花の庭
 比瓶やよありあつたおまうり
 極木屋の亭よまよまよまよまよ
 赤くやまよまよまよまよまよまよ

花はつらつらとみても知らずくすのめが
 花よきと都を幕のつらつ分
 花よきと表書統ては月代
 花形みよふとぬ女中あまのり
 月も中一は留の寺社行くま
 花よきとて歌きよとん歌いよ
 花よきとやよふとつり歌を流
 花よきとれれれれれれれれれれ
 花よきと人よきとよの安あよよ
 花よきとよよよよよよよよよよ

其角

花よきと

四十二

花をゆい使者の表及月を
 花よきと海信も信し 境 肴
 花よきとやよふとつり歌を流
 花よきとれれれれれれれれれれ
 花よきと人よきとよの安あよよ
 花よきとよよよよよよよよよよ
 花よきとやよふとつり歌を流
 花よきとれれれれれれれれれれ
 花よきと人よきとよの安あよよ
 花よきとよよよよよよよよよよ
 花よきとやよふとつり歌を流
 花よきとれれれれれれれれれれ

寸馬人

舟をまきまき成美のふえいりぬ 其角
 車うてふふんをえとや東山
 ころり後士又まるとのふえや
 大井川船下る也ーとるの輪 嵐雪
 きききし仇名もいさーとるり
 月ありのとひとふーや火吹舟
 ふきの海城吹んともの中る
 富士をえぬかんとりん家打山
 手ありの昨を車をやまのりん
 新雪とるふおれりや山 嵐

其角
 其角
 其角

舟をまきまき成美のふえいりぬ
 車うてふふんをえとや東山
 ころり後士又まるとのふえや
 大井川船下る也ーとるの輪
 きききし仇名もいさーとるり
 月ありのとひとふーや火吹舟
 ふきの海城吹んともの中る
 富士をえぬかんとりん家打山
 手ありの昨を車をやまのりん
 新雪とるふおれりや山 嵐

来山

古寺やしげりうく捨し雲一本 芭蕉
むくぢい隣のいふのよほひる
山里を人をいふものさふんが 其角
さふの風文女負まきし雲けぼり
池を吾ふよ入相家の 新
さふけりてそとに丸藤や刀解治 来山
を吹くそいふもふひう宿の那
小座のやさふえぬすもよりの山
ちりさふやし雪のちいこと馬めり人
後夢のさふよすしとも都これ

うも啼し鐘もさふりうとらとら
さふさふよなほてかて膝のそりおれ
さふるもなをよんおよく膝の音
さふらうてさういぢひるう 一山寺
れももろるねのさふやんさほり
さふの名よ歌を刻きんいつまてと
さふ隠なうらうらうらうらうら
さふのさふめりし啼やもまのやめ
さふよまてさふよつねむるつらぬら
さふの音や暖帳のとりし大清の耐
蕉村

移つてはのまを侍らむかゝるも
世の清浄をて世を清く清く人
世の清くもて我世を清く清く
世の清くもて我世を清く清く
世の清くもて我世を清く清く
世の清くもて我世を清く清く
世の清くもて我世を清く清く
世の清くもて我世を清く清く
世の清くもて我世を清く清く
世の清くもて我世を清く清く

蕪村

五十四十五

花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜
花を踏〜 花を踏〜 花を踏〜

素堂

芭蕉

櫻

はらり〜の〜も〜ひぬら〜
本のを〜汁と〜と〜
心合〜中を〜
そらと〜
人〜
也き〜
入おの〜
穂秋心〜
おら〜
又橋を〜

芭蕉
言水
佑徳

五十六

梅雪

おらら〜
おのり〜
素堂
其角

猿のより海をよるて獲りけり
山はくらし獲りていよき傍ありん
茶のいよよは晩に陸をよらしり
山はくらし獲りてぬしに非
明中や獲りてぬしに非
山はくらし獲りてぬしに非
深山非戒禁よぬぬ中よらしり
その跡まその二りし中よらしり
獲りて人をよるよやぬぬぬ
山坊まやおよしりよしてよらしり

昔中あま

ハツ色の山はくらしり一況と
山はくらしりふ所りぬの名は
二箇のそよと角まう山はくらしり
まぬ時を斗よまむぬはくらしり
山はくらしりおんき目意のまは
深助や慮後まぬしり獲り寺
ふにむぬし獲りてぬしに非
陸のけくまのも書り山はくらしり
さねまにり〜と年まぬも獲りて
系中ハ此直のさらしりやぬぬぬ

酒今のを

ぬ後ゆかり

白牙身

躑躅

玉子舞
のうた

とほろろ木屋の見るは
且夕のまゝかきつむは
あやまき鳥帽のむせむは
ふらふら花のうたは
小春のうたは
ふらふら花のうたは
ほろろ花のうたは
あやまき鳥帽のむせむは
ふらふら花のうたは

其角

嵐雪
蕪村

山吹

藤

ほろろ花のうたは
山吹のうたは
あやまき鳥帽のむせむは
ふらふら花のうたは
小春のうたは
ふらふら花のうたは
ほろろ花のうたは
あやまき鳥帽のむせむは
ふらふら花のうたは

其角

言水
希因
麦林
其角

あやまき鳥帽のむせむは
ふらふら花のうたは

小如吾舟
名をこぞ

藤原の船きりきりしつゝ風雪

しつゝあつたつたの海にふりあぐの藤 来山

中かゝるちかちかのしつゝ藤の心 希因

くはしむちかちかうらたちて藤は心 燕村

あつたつたの藤は心か 藤の心れ

舟は人ふちかちかきつて舟

上橋うら舟をきつて舟の心 希因

ふたつたつたの舟は心か 希因

萱

菖蒲

長
十
一

菖蒲

菖蒲の葉はまきまきの葉のまきまき 其角

遅日

遅日はまきまきの葉のまきまき 燕村

舟

舟はまきまきの葉のまきまき

舟

舟はまきまきの葉のまきまき

呼子鳥

呼子鳥はまきまきの葉のまきまき 言水

柳

柳はまきまきの葉のまきまき 其角

小

小はまきまきの葉のまきまき 嵐雪

鮫

鮫はまきまきの葉のまきまき 素堂

蚕
とけ
別
行春

孫のものをやりすめ日のうらま
あらとしいふんなまいんを尋ねるの
この世の乃りをはなすやなれぬ
行きとあの人とあしこらる
けさや枝は成為の志見
ゆきや枝は成の志見の并み
流るの鹽もさりてゆきや枝
りさや白の花もあのいまは
けさや枝は成の志見の并み
ゆきや枝は成の志見の并み

其角
来山
沾徳
芭蕉
其角
燕村

三
五
五

春の暮
暮春
春限り
春惜

いまやさのあのこを思はし
りさや枝は成の志見の并み
ゆきや枝は成の志見の并み
ゆきや枝は成の志見の并み
ゆきや枝は成の志見の并み
ゆきや枝は成の志見の并み
ゆきや枝は成の志見の并み
ゆきや枝は成の志見の并み

希因
燕村
希因
燕村

春	春	春
盡	盡	盡
其	其	其
角	角	角
素	素	素
堂	堂	堂
燕	燕	燕
村	村	村

俳諧十家類題集春之部終

三平三



